

あかぎサンサンかがやきキャンプ 報 告 書

国立赤城青少年交流の家では、教育事業「あかぎサンサンかがやきキャンプ」を、7 月・9 月・2 月の計 3 回実施しました。

この事業は、障がいのある子と健常の子とが、普段体験できないようなプログラムと一緒にチャレンジします。「障がいのあるなしに関係なく、誰もが楽しめる」ということが大きなテーマです。参加者同士がキャンプの中で同じ時間を過ごすことで、同年代の子どもたちと共に学び、育つ機会の足掛かりを作ることが一つのねらいとしました。また、この事業では、前年度やそれ以前から参加をしているリピーターの子も多く受け入れています。そのため、長期的な視点で子どもたちの成長を支援できることが大きな特徴です。それぞれの成長の段階や、個性を理解したうえで、プログラムの内容やスタッフの関わり方を考えています。

【スタッフトレーニングの実施：2016 年 6 月 26 日（日）】

障がいのある子とのキャンプに携わっていくに当たり、スタッフの知識や理解を深め、キャンプへの不安を取り除くため、慶應義塾大学体育研究所の野口和行氏を講師として迎え、スタッフトレーニングを実施しました。「キャンパーの個性に合わせた自然体験活動を楽しむために」というタイトルで、キャンプの基礎知識や安全、対象者理解について講義とグループワークを通して学びました。講義の中では、キャンプ中の安全管理についてや、子どもの発達の過程、障がいのある子の行動を理解するためのヒントなどについて、事例を踏まえながら考えることができました。普段から子どもの体験活動に携わっているスタッフにとっては、自身の視野を広げることもつながりました。また、グループワークでは、子どもの言動にどのような理由が隠されているのかを考え、お互いに発表しあうことで、対象者理解の考え方の幅を広げることができました。

【1 回目実施：2016 年 7 月 31 日（日）】

1 回目のキャンプは、キャンプが初めての子でも参加しやすいよう、日帰りのプログラムで実施しました。台風が近づいていて、天気心配されましたが、当日は太陽が燦々と照りつけるとても良い天気となりました。12 名の参加者が交流の家に集まり、夏の日差しの中で元気よく遊びました。

参加者が集まり、まずはこれから 1 年間キャンプで使っていく横断幕を、みんなで飾り付けしました。まっさらな横断幕の上に、各々が折り紙を貼ったり、描いた絵を貼ったりして、とてもカラフルで見ているだけで楽しい横断幕が出来上がりました。

午後は外に出て、水遊びです。日差しが強かったため、冷たい水がとても気持ち良かったです。水が入った大きい桶に、お風呂のように浸かってしまう子もいました。参加者もスタッフも、全身びしょびしょになりながらも、思いっきり遊ぶことができました。水遊びを始めてしばらくすると、今回のキャンプのメインイベント、スイカ割りの時間です。大きくて立派なスイカが登場すると、みんな興味深そうに集まってきました。目隠し

をして棒を持ったら，あとは周りの声だけを頼りに，スイカを目指して歩いていきます。見事スイカに棒が命中すると，大きな歓声が上がりました。頑張って割ったスイカはとても甘く，みんなで美味しくいただきました。

日帰りのキャンプでしたが，初めて出会った友達とも仲良く遊ぶ子どもたちの姿が印象的でした。天気にも恵まれ，子どもたちは赤城の夏を目一杯楽しみました。

〈1回目のキャンプの様子〉



まずは歌を歌ったり，ゲームをしたりしながら，徐々に緊張をほぐしていきます。



横断幕に，思い思いの飾り付けを施します。とっても賑やかな横断幕ができあがりました！



みんなでお弁当タイム。外でみんなで食べるお弁当は，いつもの何倍も美味しく感じます。



水遊びでは、みんなびしょびしょになるまで水を掛け合いました。気温が高かった
ので、冷たい水が心地よく感じました。



夏といえばスイカ割り！立派なスイカだったので、割るのにはかなり苦戦しまし
た。あまーいスイカに、みんな笑顔がこぼれます。



みんなで作った横断幕を持って
記念撮影。1日だけのキャンプで
したが、楽しい思い出がたくさん
できました。

【2回目実施：2016年9月10日（土）～11日（日）】

2回目のキャンプでは、自分たちの力でテントをたて、そこで寝泊まりをしました。少し不便だけれど、日常ではなかなか体験できないワクワク感が感じられるような2日間でした。このキャンプには、13名の子どもたちが参加をしてくれました。

キャンプ場に移動したら、まずはテント張りです。最初はぎこちない手つきでしたが、

だんだんと立て方のコツを掴んできたのか、友達と役割分担をして効率的に作業ができるようになりました。積極的に他の子の手伝いに行く姿も見られました。完成したテントは中が思ったより広く、各自ワクワクした様子で寝袋や荷物を運びこんでいました。

夕食も自分たちの手で作ります。今回はカレー作りを行いました。材料を切るのはもちろん、火起こしも自分たちの手で行います。同じ班の友達と協力し合いながら、美味しいカレーを作りました。カレーはみんなほぼ完食し、後片付けも声を掛け合いながらスムーズに行うことができました。

夜はお楽しみのカンパファイヤーです。とつぷりと日も暮れたころ、点火式が行われました。暗闇の中に火がともる瞬間は、どこか幻想的で温かい気持ちを引き起こします。明るい炎に照らされながら、みんなでレクリエーションを楽しみました。いつもと違う雰囲気での交流で、友達との仲もさらに深まったようです。大いに盛り上がったカンパファイヤーが終わる頃、名残惜しそうに小さく燃える火で、マシュマロを焼いて食べました。

2 日目はテント撤収後、カンパ場周辺を探検しました。探検する中でいくつかのお題を出され、それをクリアするとマスキングテープやボタンなど、クラフトの材料と交換できるカードが手に入ります。カードを集める道中、色々な植物や虫を見つれたり、小川を見つけて遊んだり、楽しい発見もありました。

午後は集めたクラフトの材料を使い、カンパの思い出をぎゅっとつめこんだフォトフレームを作りました。カラフルな材料で飾り付けを施し、友達やスタッフのサインを集めていた子もいました。

まだまだ暑さの残る時期のカンパでしたが、普段できないような体験を通じて、参加者も一回り成長したように見えました。

〈2 回目のカンパの様子〉



まずはテントを設営しました。みんなで協力すれば、あっという間に完成です。テントの中は広くて快適でした。



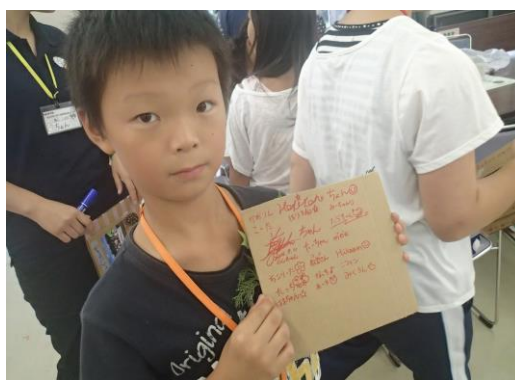
カレー作りでは、野菜を切る人と火起こしをする人とに分かれて頑張りました。美味しく食べた後は、片付けもしっかり自分たちで行います。



夜はキャンプファイヤーで盛り上がりました。レクリエーションを通して、参加者の交流も深まったようです。最後はマシュマロを焼いてみんなで食べました。



2 日目のキャンプ場探検は、班のみんなで話し合いながら、どうやって進んでいくか決めていきます。道中で見つけた沢には、カニが住んでいました。



色とりどりの材料や、森で見つけた木の実や葉っぱで飾り付けたフォトフレームです。みんなのサインを集めてまわる子もいました。

【3 回目実施：2017 年 2 月 18 日（土）～19 日（日）】

3 回目のキャンプのテーマは、「冬の赤城を楽しむ」。寒い時期だからこそ楽しめるプログラムを用意しました。赤城山の山頂付近で雪遊びをすることが、今回の目玉のプログラムです。今回のキャンプは、10 名の子どもたちが参加をしてくれました。

1 日目のメインプログラムは、夕ご飯の「すいとん作り」です。切った野菜やお肉を大きなお鍋で煮て、そこにすいとんのタネを落としていきます。スプーンをうまく使って、タネを落としていく過程がとても面白かったようです。楽しく作ったすいとんは味も抜群で、みんな野菜もモリモリ食べていました。その日の夜は、入浴後ゆったりとした時間をお部屋で過ごし、和やかな雰囲気の中で昔懐かしい遊びや、上毛かるたなどをして楽しみました。最初は緊張気味だった参加者の顔も、この時間には笑顔があふれるようになり、お互いの仲も深まっていました。

2 日目は、朝のお楽しみがありました。実は、前日に「氷アート」の仕込みをしておいたのです。氷アートは、アルミのカップなどにビーズや木の実を入れ、そこに水をはって一晩おいて作ります。赤城山の夜の冷たい空気に冷やされ、水はしっかりと固まっていました。カラフルな飾りを閉じ込めた氷アートが、朝日に照らされとてもきれいでした。子どもたちが、身近な自然現象に興味をもつきっかけになったのではないかと思います。

朝食後、いよいよ赤城山へ雪遊びに出かけます。スキーウェアやスノーブーツでしっかりと準備を整え、バスで赤城山第一スキー場へ向かいました。スキー場は風が強く吹いて

いましたが、この日はとても良いお天気に恵まれました。今回の雪遊びで大人気だったのは、スノーチューブという、空気で膨らませたゴム製のソリです。普通のソリよりもスピードが出て、かなりスリリングですが、子どもたちは夢中になって滑っていました。もちろん普通のソリで滑ってくる子もいれば、スコップとバケツを使って雪遊びをする子もいます。各々が気に入った遊び方で、赤城山の冬を満喫できたようでした。

午後は交流の家に帰り、フォトフレームを作りました。ビーズやボタンをくっつけたり、カラーペンでデコレーションを施します。白い綿で雪を表現する子もいました。

第3回目のキャンプは、全体的にとってもゆったりとして和やかな雰囲気が流れていたように感じます。その分、子どもたちも各々の楽しみ方で、冬のキャンプを満喫できたのではないのでしょうか。

〈事業の様子 3 回目〉



はじめは、みんなで主に体を使ったゲームを行い、緊張をほぐしていきます。だんだんと参加者に笑顔が見られるようになりました。



すいとんのタネを作ります。丁度いい固さになるまで混ぜる作業が、思ったより大変でした。スプーンをうまく使って、お鍋へと入れていきます。



野菜も自分たちで切ります。慣れた手つきで包丁を扱う子もありました。みんなで作って、みんなで食べる。これが、ごはんが何倍も美味しくなる魔法です。



1 日目に仕込んでおいた氷アート。翌朝にはしっかりと凍っていました。身近な自然現象に触れ、子どもたちは目を輝かせて作品に見入っていました。



雪遊びの様子。普段あまり目にする事のない銀世界に、子どもたちも興奮気味のようでした。スタッフもついていくのがやっとなくらい、子どもたちはパワフルに遊びまわっていました。



最後にはフォトフレームを作り、2日間の思い出を詰め込みました。白い綿は、今回のキーワードの「雪」をイメージしているようにも見えます。



今回もとても良い天気に恵まれました。「鍋割山」をバックに、記念撮影です。

【全3回のキャンプを終えて】

今年度の事業は全3回と、昨年度より少ない日程での開催となりました。しかし応募してくださる方はとても多く、本事業のねらいが多くの方にご理解をいただいていると同時に、こういった事業への需要が高まってきているのだと実感しました。障がいを持っている子は、どうしても体験活動の機会が少なくなりがちです。同時に、障がいのある子と健常の子とが、同じ空間で同じ時間を共有するという機会も、多いとは言えません。本事業では、「障がいのあるなしに関係なく、誰もが楽しめる」キャンプを提供することをねらいとしています。それぞれができること、できないこと、苦手とすること、得意とすることは異なります。障がいのある子も健常の子も、それは同じです。キャンプという空間であるからこそ、それぞれの個性を十分に活かしながら、輝くことができると思っています。今年度のキャンプを終え、このことを改めて実感させられました。

本事業に参加した子どもたちが、キャンプの中で得た自信を、日常生活の中で発揮していってくれることを願っています。またこの先も、どのような個性を持った子でも輝くことができるようなキャンプを提供できるよう、スタッフと共に日々努力をしていきたいと思っています。

担当：事業推進室 大濱望美・田村佳之